

ゼミ論文
『日本統治下における親日派台湾人』

2008年2月
日本大学国際関係学部国際交流学科3年
桜山 修一

I. 章立て

第一章 概要

はじめに

第二章 台湾総督府と第一期親日派台湾人

台湾同化会

台湾議会設置運動における第一期親日派台湾人と台湾総督府
台湾総督府による同化－皇民化教育

第三章 同化－皇民化教育から生まれた第二期親日派台湾人

葉盛吉

元日本人台湾人

第二期親日派台湾人の問題

第四章 結論

II. 要旨

高校2年生の春休み、台湾ボーイスカウトの家にホームステイする企画に参加し実によくしてもらったため、私の心の中には「台湾の人はいい人」という思いが強く残った。後に台湾がかつて日本の植民地であった時代の抗日反日の歴史を学んだとき、私のイメージの中の台湾はゆれ動いた。日本統治領時代に親日であった台湾の人というのはいたのだろうか、それなら彼らはなぜ親日だったのだろうか、彼らは一体どのような人だったのか。そうした疑問をゼミ論文の問題提起とする。

本論文は親日派台湾人を一期と二期に分けている。第一期親日派台湾人は、1920年以前の教育を受けてきた親日派台湾人のことである。第二期親日派台湾人は、1920年以後の教育を受けてきた親日派台湾人である。台湾統治に関していえば、統治当初は学校教育で日本語を強要する程度であり、台湾の人々に日本の精

神を注ぎ込み、同化を強要することはなかった。しかし大正 7 年日本に原内閣が確立し、台湾統治が武官統治から文官統治へと移行し始めた頃から、同化教育はより強固となり、日本語の伝授だけではなく、日本様式的生活、日本道徳精神の伝授など、徹底した日本精神の伝授を始めたのだ。

そうした時代区分をふまえた上で、第一期親日派台湾人と第二期親日派台湾人の特徴を整理する。第一期親日派台湾人は その最大目的として台湾における台湾人の地位を向上することで圧政を和らげることを念頭において、その目標達成のために、日本人と親しくするという傾向があった。一方 第二期親日派台湾人は同化—皇民化教育の影響で、言語、生活様式ばかりか本質的な民族意識まで日本的になった。しかしそれと同様に台湾という民族意識も確立されており、双方が共存した民族意識を形成した。現在の台湾で「トオサン」と呼ばれる人びとは、子供の教育において 正直、勤勉、時間厳守、に始まり「教育勅語」における日本的価値を尊重している。

第一期親日派台湾人が日本と協力したのが、自分たち台湾人の政治的目的達成段のため、というのは理解できる。第一期親日派台湾人である林献堂は、台湾総督府の統治に表面上助力している。そして「霧社事件」に加わっていた台湾先住少数民族も、抗日蜂起以前は台湾総督府に従順であった。

韓国の場合を考える。今日の韓国で、戦時中の親日派とは、統治面で日本帝国主義に協力していた「売国奴」「民族反逆者」のことに他ならない。親日派朝鮮人の「親日」の動機については 現在様々な議論があるが、最も一般的な動機は自らの地位保全と個人的利益とされている。しかし彼らの中にも、日本の非道な統治を緩和もしくは止めるために日本の植民地権力に接近しようと考えた人もいたのではないか。その場合は第一期親日派台湾人と共通していて、「親日」と言う道具を使って、現状を改善していこうと考えたのである。

一方 第二期親日派台湾人のように 台湾的日本人アイデンティティーを持った親日家が朝鮮にいたであろうか？ おそらくそのような親日家は少なかったのではないかと考えられる。台湾は、日清戦争、日清講和条約により中国に捨てられたと言う意識が存在していたため、中国人という民族意識が日本統治初期から低かった。しかし朝鮮では朝鮮人という民族意識は高く確立されていた。そのため日本人アイデンティティーを受け入れることはできず、第二期親日派台湾人のような親日家は少なかったと思われる。

こうして考えると、自己アイデンティティーまで日本風に染まった第二期親日派台湾人の存在は特殊なのであろう。悲しいことだが完璧な日本化を果しても日本人による差別が続いたため、民族意識の自覚が起こる。しかし、幼少時代から形成された日本人としてのアイデンティティーは抜けず、両者の確立、自己の保全の為、台湾的日本人アイデンティティーと言う歪んだアイデンティティーを形成していったのである。

